## 03 治療院の外で気づかされた灸の煙問題

同院はベッドを8台用意しているが、驚くことに以前別の場所で開業していたときは全部で23台もあった（**図11**）。当初は現在のような排煙設備がなく施灸時の煙が悩みであり、23台すべてで温灸を行ったときは「煙で治療室の奥が見えなくなるほど」であったという。

そんな灸の煙問題を解決する装置として、排煙筒とビニールシートを備えた移動式の装置を作成。患者の施灸部位をビニールで覆い、上部に設置した排煙筒から煙を逃がすようにすることで、治療室に灸の煙が充満することはなくなった。

実は、渡邉氏が灸の煙に対して積極的に取り組むようになったのは、スーパーでのある出来事がきっかけだった。

「ある日、治療が終わってからスーパーへ買い物に行ったら、すれ違う人がみんな私を見るんです。なぜだろうとあれこれ考えているうちに、『自分が艾臭いからだ』と気がつきました」

それから渡邉氏は、灸の煙問題を解決するため換気扇を増やすなどさまざまな方法を試し、現在の形をつくり上げた。2009年頃に父母の介護などのため、実家を治療院に改築して移転。ベッドも現在の8台まで減らしたが、灸の煙対策についてはそれまでの方法を引き継いでいる。

換気扇の風力にも渡邉氏のこだわりがある。温灸の熱が吸い上げられることがなく、それでいて煙がこもらない、ちょうどいい風量になるよう調節したという（**図12**）。また、定期的に掃除が必要になるため、予備にもう一つ用意し、掃除の時期が来たら取り替えることで、治療に影響がないようにしている。

「灸の煙には本当に苦労させられました。それでも使うことをやめようとは思いませんでしたね」

なお、渡邉氏は治療後の艾の灰は「畑にまいて除草剤代わりにしています」と、艾をとことん活用している。

図11

以前の治療院の様子。ベッド23台すべてに排煙装置を備えていた（写真提供：渡邉元氏）

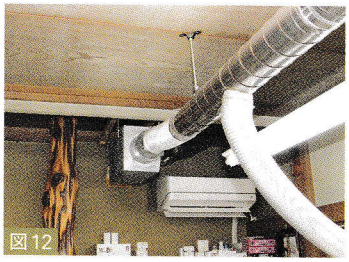
図12

各ベッドの排煙装置は天井に設置された換気扇につながっており、灸の煙はこの配管を通り屋外に放出される

## 04 温灸と鍼、パルス通電を組み合わせた治療

渡邉氏の温灸治療は、主に腰痛や坐骨神経痛、脊柱管狭窄症などに用いる。また、温灸と同時に置鍼とパルス通電を行うことで、筋が緩めやすくなるという。

温灸による治療を行う際は、まず治療点へ刺鍼してから、部品Bをかぶせる。部品Bの中ほどには格子状の金具があるので、鍼をよけながら皮膚に設置できる（**図13、図14**）。このとき、一緒にパルス通電の準備も行う。次に部品Aに紙筒を装着、点火して部品Bにはめ込む。施灸中は患者へ灰がつかないよう、中心に円形の穴を開けたタオルを使い、その円に温灸器が入るよう患者にかぶせる。温灸器を置いたら排煙筒がついた装置を温灸の位置へ移動し、装置に備え付けられたビニールシートを患者にかぶせてパルス通電を起動する（**図15、図16**）。治療時間は40分ほどとのこと。

「温灸をしている部位は42.5℃くらいになっていて、それが患者にとっても一番気持ちがいい温度でもあります。それで40分ほど温めていると、筋が緩んでくる。そこへパルスをかけて揺らしてやると、筋が動かされて血流が改善されるんです」